

経済学部 坂元 浩一先生推薦 『何でも見てやろう』

小田 実著
(講談社)

作家の小田実氏が若いときに体当たりで海外を放浪した紀行です。1961年に初めて出版されました。アメリカに留学した後に、欧州からインドにかけて旅行したものです。バックパッカーの走りとしての旅行でしたが、秀逸な比較文明論ともなっています。

本推薦者(坂元)は、この本の影響を受けて、1970年代に1年間のユーラシア大陸の放浪旅行を行いました。すなわち、シベリア鉄道経由で欧州へ。8か月半滞在した後、イスタンブールから小田氏も訪問したインドへ。帰国後に読んだ五木寛之の『青年は荒野を目指す』(1967年)の紀行とも重なります。

『何でもみてやろう』では、まずフルブライト奨学金の面接時のすさまじく低い英語会話の話から始まって、欧米主導の世界の体制や文化への痛烈な批判から始まります。ここで、読者は、より客観的な目で世界を見る、日本を再考することを始めます。また、自分で批判的に考えることの重要性を学びます。

次に、ネット上での書評でも取り上げられているように、ギリシャの貧しい村での人々の歓待などにおける小田氏による積極的なコミュニケーションのあり方を学びます。それによって、人と人との関係構築の重要性を理解することができます。

そして、著者は、インド、カルカッタにおける「不可触民 小田実」となります。推薦者は、インド亜大陸一周を敢行して同様な経験をして、世界の貧困問題に関心を持ち、大学院に進学しました。そして、アフリカにおける国連勤務を経て、途上国の開発や援助の問題にコンサルタント、大学教員として一貫して関わることとなりました。本書は推薦者の人生を決めた一冊です。